埼玉工大研究紀要

徂徠集・序類　訳注稿（一）

岡本光生
澤井啓一

凡例

一、本稿は、『徂徠集』巻之八から巻之十一までに所収された「序」類四十点を成立年代順に取り挙げ、それに語注・訳注を加えたものである。（但し、すでに現代語に訳されたり、返り点・注釈が付けられて公刊されているものは除く）。

一、今回は、次の四点を収めた。「賀秦君五十序」（巻之九／宝永元年・一七〇四）、「送野生之洛序」（巻之十／宝永三年・一七〇六）、「次公字叙贈行」（同前／宝永五年・一七〇八）、「叙江若水詩」（巻之八／同前）。

一、「序」類四十点を、所収順ではなく、成立年代順に扱ったのは、徂徠の古文辞学が成熟する過程において、その発想や文体に変化があるか否かを調べるためである。なお、「序」類四十点の成立年代については、平石直昭『荻生徂徠年譜考』（平凡社）を参考にした。

底本

一、本稿の底本としては、ぺりかん社から近世儒家文集集成シリーズ3として影印刊行された平石直昭編集・解説『徂徠集　付徂徠集拾遺』を用いた。

本文・語注

一、底本の原文に以下の内容を加えたものを本文とし

た。底本の句点に従ったうえで、訳注者の見解により、新たに読点・並列点を施し、また訳注者の読み方を示すために返り点を加えた。

一、本文の漢字は、若干の異体字・俗字を正字または通行の文字に改めた以外は、底本のままとした。

一、語注は、古文辞の手法を解析するために、語句の典拠を指示した。また、典拠が複数想定される場合には、訳注者の判断によって、その代表的な例のみを示すことにした。

一、語注を作るにあたって、以下のものを参照した。

①釈義端『徂徠集便覧』(静嘉堂文庫蔵)、②江南蘊『徂徠先生文集解』(東北大学附属図書館狩野文庫蔵)、③著者不明『徂徠集管見』(同前)。

訳文・訳注

一、訳文では、適宜〔 〕および( )を用いて原文の意味を補足した。

一、漢字は、原則として、当用漢字を用い、異体字・俗字を正字または通行の文字に改めたが、若干の文字は、底本のままとした。

一、訳注は、人名・地名の考証や内容を理解するに必要な知識を示すに止どめた。

賀二秦君五十一序

姑文川勝藤右衛門君者、秦氏也。是歳甲申、寶永改元、行年五十、(1)秋七月二十有四日、正其懸弧之辰也。(2)内姪物部茂卿、稱レ觴(3)而祝曰、自レ古上レ壽者、必以二華封三言一爲二稱首一、(4)亡レ論二其尊卑(5)匪媲一。秦君食祿七百石、職在二執戟一。(6)方今世承二昇平一、(7)四方無レ虞。(8)士之生二斯時一、(9)樊・曹野戰之功、(10)既不レ可レ獲、許・史剖符(11)之幸、亦匪レ所レ欲。陞レ職吕レ資、增レ秩(12)以レ考。故雖二其巧宦者一、(13)亦大氐不レ能レ出二其資與レ考之外一、而坎軻沈滯、(14)逞逞(15)爲レ然。且國家之養レ士、本以取二守禦之用一、(16)而擇二其才諝者一、分二理庶務一。(17)若使二皆遷レ職、則國孰與レ守。(18)不レ遷則秩

不レ得レ增、而富不レ可レ祈也。又秦君無レ子、養二同姓之兒一爲レ嗣、以體二祖宗之心一、則秦之指若干。寔爲二多男子一、而多男子不レ可レ祈也。亡レ已其壽乎。秪控弦之俗、上レ勇嬾レ死、習以成レ性、國于以彊。縱使二上聖秉レ化、必竢二再變一、然後可二以至二於道一。故因レ民之治、就以爲レ教、榮辱貴賤、由レ此而分、則壽亦不レ可レ祈也與、是何以爲レ祝邪。以二夫炎農邁レ德、其裔以昌。唐・虞之世、有レ若二四嶽一、文・武興レ周、有レ若二子牙一。以迨二乎呂政握レ籙、皇二帝其王一、守二令其侯一、曰レ朕曰レ制、烈二于萬世一而不レ渝。然其後不レ血二食于中國一、而綿二綿乎吾口東方一者、秦君其人也。稽二諸譜牒一、皇政之孫曰二孝武王一。王生二竺區宋孫一、宋孫生二法成一、成生二功滿一。寔始歸化。滿生二融通一、或曰二弓月一。是生二普洞一、又曰二浦東一、其子酒。酒生二意美一、美生レ忍、忍生二丹照一、照生レ河、河生二國勝一、勝生二川勝一。是曰二廣隆一、磯城島朝大連。其弟川滿・川武。滿・武之後、或爲二禁兵一、或爲二伶官一。所謂武文、及二今散樂師一有下稱二其冑者一也。唯川勝食二封丹陽一、世爲二爪牙一。曁二足利氏之末世一、有二備後守繼氏一。其子主水正秀氏、娶二明智光秀女一、生二丹波守廣繼一。廣繼之子主水廣明、乃吾秦君之父也。始秀氏在二福智山一食二賦十八萬石一、寔爲二列藩一。勝國之時、慮二邑大見レ忌、而詭稱二三千一、遂爲二朘削一云。烏虖秦君既能以二祖宗之心一爲レ心、則農・嶽已降、精神與レ吾流通亡レ閡。是由レ身而上、千百世一人也。子孫亦能以二秦君之心一爲レ心、則由レ身而下、千百世一人也。繼レ志述レ業、貽二厥孫謀一、是亦可二以爲レ壽與、而富與二多男子一、在二其中一矣。秦君听然而笑、嚌レ觴者三、興而請曰、吁吾乃得二吾壽一矣。子其亦爲レ吾書下其所二以爲レ壽者一上。傳二之吾子孫一、庶下乎吾壽之不二唯能脩レ上、而亦能不レ短レ下也。遂書以爲レ獻。

〔語　注〕

(1)莊子・天運〈孔子行年五十有一〉。(2)禮記・郊特牲〈縣弧之義也〉、禮記・謝義〈故男子生、桑弧蓬矢六、以射天地四方〉。(3)史記・滑稽傳〈奉觴上壽〉、漢書・兒寬傳〈臣寬奉觴再拜、上千萬歲壽〉、

北史・周宗室傳〈武帝率諸親戚、行家人禮、稱觴爲壽〉、(李滄溟)太方伯亢太夫人序〈稱觴爲壽〉。(4)(司馬相如)封禪文〈前聖所以永保鴻名、而常爲稱首者用此〉。(5)後漢書・袁紹傳〈害及一門、尊卑大小、同日幷戮〉。(6)史記・淮陰侯傳〈臣事項王、官不過郎中、位不過執戟〉。(7)漢書・梅福傳〈使孝武皇帝聽用其計、升平可致〉、(韓愈)賀慶雲集〈昇平之符既兆、仁壽之域以躋〉。(8)書・畢命〈四方無虞〉。(9)孟子・盡心下〈生斯世也〉、孟子・萬章上〈於斯時也〉。(10)史記・曹相國世家贊〈曹相國參攻城野戰之功所以能多若此者、以與淮陰侯俱〉。(11)史記・高祖本紀〈及論功、與諸列侯剖符行封〉、漢書・高帝紀〈始剖符封功臣曹參等爲通侯〉。(12)史記・平準書〈爲郎增秩〉。(13)漢書・汲黯傳〈安文深巧善宦〉、(潘岳)閑居賦〈題以巧宦之目〉。(14)(東方朔)七諫〈坎軻而留滯〉、後漢書・崔駰傳〈胡爲嘿嘿而久沈滯也〉。(15)(楊雄)甘泉賦〈逞逞離宮〉。(16)國語・齊語〈小國諸侯有守禦之備〉、(秦觀)詩〈守禦用〉。(17)隋書・百官志〈分司庶務〉。(18)孟子・離婁下〈君誰與守〉。(19)漢書・韋玄成傳〈違祖宗之心〉、同前・戾太子傳〈承萬世之業、體祖宗之重〉。(20)史記・貨殖傳〈僮手指千〉。(21)禮記・曲禮下〈始服衣若干尺矣〉。(22)孟子・梁惠王上〈無以則王乎〉。(23)史記・匈奴傳〈控弦之士三十餘萬〉。(24)論語・陽貨〈君子尙勇乎〉。(25)書・太甲〈習與性成〉。(26)史記・蒙恬傳〈察於參伍、上聖之法也〉。(27)(宋之問)傷王七祕書監詩〈秉化〉・(28)論語・雍也〈齊一變至於魯、魯一變至於道〉。(29)左傳・昭公七年〈務三而已、一曰擇人、二曰因民、三曰從時〉。(30)易・繫辭上〈是故列貴賤者、存乎位〉、同前〈榮辱之主〉、戰國策・齊策〈死生榮辱尊卑貴賤〉。(31)書・大禹謨〈邁種德〉。(32)書・君奭〈有若伊尹〉。(33)(王融)永明十一年策秀才文五首〈朕秉籙御天、握樞臨極〉、(張衡)東京賦〈高祖膺籙受圖〉。(34)史記・始皇本紀〈天子自稱曰朕〉。(35)史記・始皇本紀〈命爲制〉。(36)書・胤征〈烈于猛火〉、史記・始皇本紀〈二世三

世至于萬世、傳之無窮〉、（張衡）西京賦〈漢載安而不渝〉。(37)左傳・莊公六年〈社稷實不血食〉。(38)詩・緜〈緜緜瓜瓞〉。(39)史記・太史公自序〈取之譜牒舊聞〉。(40)後漢書・循吏傳〈流人歸化〉。(41)（干寶）晉紀總論〈禁兵外散於四方〉。(42)詩・簡兮・序〈衞賢者仕於伶官〉。(43)詩・祈父〈予王之爪牙〉、（李樊龍）送右都御史太倉王公總督薊遼序〈王之爪牙〉。(44)易・繫辭下〈易之興也、其當殷之末世、周之盛德也〉。(45)晉書・曹志傳〈列藩九服〉。(46)周禮・地官・媒氏〈凡男女之陰訟、聽之于勝國之社〉、同前・秋官・士師〈若祭勝國社稷、則爲之尸〉。(47)後漢書・楊李翟應霍爰徐列傳論贊〈以高明見忌〉。(48)漢書・董仲舒傳〈民日削月朘〉。(49)漢書・董仲舒傳〈烏虖〉。(50)莊子・刻意〈精神四達並流、天所不極、上際於天、下蟠於地〉。(51)漢書・董仲舒傳〈與天地流通而往來相應〉。(52)（陸機）文賦〈恢萬里而無閡〉。(53)禮記・中庸〈夫孝者、善繼人之志、善述人之事者也〉。(54)詩・文王有聲〈貽厥孫謀〉。(55)論語・爲政〈祿在其中矣〉。(56)（司馬相如）上林賦〈听然而笑〉。(57)禮記・雜記下〈主人之酢也嚌之〉。(58)漢書・王莽傳〈傳于子孫、永亨無窮之祈〉。

秦君の五十を賀するの序

伯母の夫、川勝藤右衛門君[1]は、秦氏である。この甲申、宝永と改元された年[2]、ちょうど五十歳、秋、七月二十四日が、まさに誕生の辰である。そこで甥、物部茂卿がさかづきをあげ、祝して言う――

《昔から長寿をことほぐものは、きまってあの〔『莊子』天地篇にみえる〕華の関守の「寿」「富」「多男子」の三事をまずはじめに述べ[3]、親族や夫人について言を費やすことはない。

秦君の食禄は七百石、「執戟」の職についている。現在、時代は昇平の世を承け、四方に戦乱の虞れはない。士がこうした時代に生まれあわせたからには、〔漢初の功臣である〕樊噲・曹参のごとき戦闘での功績を得ることはできないし、〔漢代の〕許氏や史氏[4]の

ように外戚の地位を利用し、諸侯となる僥倖もまた、秦君の望むことではない。現在では、昇進は文官としての能力により、増秩は文官としての功績による。だから、上司に取り入って出世する部下といえども、ほとんど、能力と功績なしに出世するということはないし、時勢に遇わず、低位に沈滞している人も、多くの場合、能力と功績とがないためにそうなのである。そもそも国家が士を養うのは、本来国の守りに用だてるためであるが、しかし、なかから小才のきくものを択び、もろもろの職務を分担せしめるのである。しかし、もしすべての士が、そうした職に遷ったとすれば、国はいったい誰が守るのであろうか。といって遷らなければ、功績は立てられず、秩禄は増加しないのだから、かくて秦君の場合、「富」を祈ることはできない。

また、秦君には子がなく、同姓の子を養い、後嗣とし、先祖の心を継承しているほどであるから、秦氏一族の数はわずかである。秦君の場合、「多男子」を祈ることはできない。

「富」と「多男子」と、どちらも祈ることができないとすれば、果たして「寿」についてはどうであろうか。

まさしく、武人の風俗として、勇を尚び死を軽んじ、それが習慣となり、あたかも生まれつきのようになる。国はかくて強大となった。たとえ、上代の聖王が教化したにしても、すぐには理想的な世に至ることはできないであろう。だから、民の風俗のままに従う政治を教条としていけば、栄辱貴賤はことごとく勇敢で死を恐れないか否かによって分かれる。だとすれば、「寿」もまた、秦君の場合、祈ることはできないではないか。

それでは何を述べ祝言としようか。

そもそも炎帝神農氏は徳に邁め、子孫はそれによって昌んになった。唐・虞の世に堯・舜をよく補佐した四嶽は、神農氏の子孫であったし、文王・武王が周を興したさい、よく補佐した子牙（太公望呂尚）も神農

氏の子孫である。[5] 秦王政（実は呂不韋の子）が政権を握ると、王号を改めて皇帝と称し、諸侯を廃して郡守・県令を置き、皇帝の自称を「朕」とし、命令を「制」とし、その威烈を万世の後まで、輝かしめんとした。しかし、その子孫は中国では断絶し、わが東方に長く続いているのだが、秦君こそその子孫にほかならない。

このことを系図にもとづいて調べてみると、[6] 次のようになる。始皇帝の孫を孝成王という。王は竺区宋孫を生み、孫は法成を生み、成は功満を生み、ここで、ようやく日本に帰化し、満は融通を生んだ、あるいは弓月ともいう。弓月は普洞を生んだ、あるいは浦東ともいう。その子が酒である。酒は意美を生み、美は忍を生み、忍は丹照を生み、照は河を生み、河は国勝を生み、勝は川勝を生んだ。かれは広隆ともいい、欽明朝の大連となった。その弟に川満・川武がいた。満と武の子孫はあるいは禁裡の兵となり、あるいは楽人となった。いわゆる武官・文官であるが、今日に及んでも能楽師にその子孫だと称するものがいる。[7] ただ、川勝のみ封を丹波の南部に食み、代々王を警護する武将となったのだ。足利氏の末世に及んで、備後守継氏なるものがいた。その子、主水正秀氏は明智光秀の女を娶り、丹波守広継を生んだ。広継の子、主水広明が、わが秦君の父である。はじめ、秀氏は、福知山にあって十八万石を食んでおり、有力な大名であった。しかし、滅亡した前朝（豊臣氏）において、食邑の大なるがゆえに忌みられるのを慮かり、詭って三千石と称し、ついに削られてしまった、ということだ。

ああ、秦君が先祖の心をわが心としているからには、その精神は、神農・四嶽から秦君にまで閉ざされることなく貫流しているのだ。だから、秦君はまさに百世・千世以前の祖先その人なのである。子孫もまた秦君の心をわが心とすることができれば、百世・千世以後の子孫といえども、秦君その人なのである。このように、志を継ぎ、業を述べ、子孫にそれを貽していく、これこそまさに「寿」なのである。そして「富」

と「多男子」とは、おのずとそのなかに生じてくるのだ》

秦君は、にっこり笑い、さかづきを口にすること三たび、興に乗って言う――

《ああ、わたしはかくて長寿を得た。あなたにお願いするのだが、わたしのためにわが長寿の所以を書いてくれ。これを子孫に伝え、わたしが遠い祖先から継承した長寿を、また長く子孫によって継承されることを願うのだから》

ついに書して、贈り物とする。

〔訳　注〕

(1) 川勝藤右衛門広成、寛文四年八月九日（一六六四）はじめて厳有院（家綱）にまみえ、延宝六年三月二十九日（一六七八）御小姓組に列し、貞享四年十二月九日（一六八七）遺跡を継ぎ、正徳三年閏五月二十一日（一七一三）死す。妻は小嶋助左衛門正朝の娘、すなわち徂徠の母の養父の実娘。（寛政重修家譜　巻一一八五）

(2) 宝永元年は一七〇四年にあたる。

(3) 『荘子』天地篇の次の記述を踏まえている。

堯観乎華。華封人曰、嘻聖人、請祝聖人、使聖人寿。堯曰、辞。使聖人富。堯曰、辞。使聖人多男子。堯曰、辞。封人曰、寿富多男子、人之所欲也。女独不欲。何邪。堯曰、多男子則多懼、富則多事、寿則多辱。是三者、非所以養徳也。故辞。

(4) 許氏は前漢宣帝の皇后の一族。史氏は武帝の子、戾太子の夫人、すなわち宣帝の祖母の一族。

(5) 四嶽については『尚書』堯典、子牙（太公望呂尚）については『史記』斉太公世家に記載がある。

(6) いかなる系図か不明。

(7) 金春氏がそうであるという。

（岡本）

送二野生之一洛序

龍門子述二五帝德一、采二其言之尤雅馴(1)者一、是則雅喙之別遠矣。迨二後世曼禹氏之徒一、乃曰、古之喙、今而謂二之雅一、是亦胡然(2)。通二聲音于古今一、窮眇(3)乎其無閡也。唯自二晁卿不レ反、備公莫レ繼、而吾口東方之學者、囿二足迹之所レ限(4)、聲字之學、悉爲二文具一(5)。是以其所レ呷二佔畢一(6)者、咸在二華人之恒言一(7)、而宋儒麈二尾性命一、明士口二吻雌黃一(8)、方言(9)・鄉音(10)、往往乎在、則率皆爲二難字之過一(11)、徒哦二桑翁之詩一以止焉耳。至二於埤蒼・五雅、詁訓(12)具存(13)一、則乃怪二誥・盤之不二聱牙一(14)也。是亦何其顚二倒艱易一(15)乃爾邪。間者予較二二十一史一、六朝以還、言之涉二俚常一者何限。若二宋史不耐煩、齊書東西、梁書樓羅・透水、南史・北史笨・子細・功夫一、凡若レ斯類、更レ僕(16)亦未二之有一能殫一焉。故予謂二無レ已則(17)崎陽之學一乎。崎者夷夏之交(18)也、海舶(19)瓌奇之所二輻湊一(20)處也、譯人居レ之。其爲レ俗也、羯羠(21)不レ均、奢豪(22)喜游(23)。是以其人折レ節而學(24)焉者或鮮矣。然其辨二宮徵(25)一、晰二腭齒一、通二曉方國(26)之言一(27)、蓋亦楚人之在二莊嶽間一(28)者焉乎爾。嗚呼吾之冥二游崎陽一者久矣哉。管子有レ言、思レ之不レ已、神將二來助一(29)。予始レ之、得二崎人蘇山皷生一。次レ之、得二東野藤生一、藤生也者、學二諸崎人石吳峯氏者一也。又得二搗謙野先生者一以友レ之、亦崎人林蘿山氏之甥也。是皆人二其戶一、闕二其人一(30)、倭二其衣冠一、華二其笑語一。莫レ不四愕眙(31)相顧、以爲二六十有六州之地、所レ鍾何間氣(32)以生二若人一(33)焉。其學大氐主二水滸・西游・西廂・明月之類一耳。鄙瑣猥褻、牛鬼蛇神(34)、口莫レ擇レ言(35)、唯華是效。其究也、必歸下乎協二今古一、一中雅喙上以明二聲音之道一乃止耳。習而通レ之、則大海之西、赤縣之州(36)、其人蓋旦莫遇(37)レ之矣。夫然後華人之所レ艱、吾亦艱レ之、華人之所レ易、吾亦易レ之、何至下於顚倒如二嚮所レ謂者一哉。是可レ謂下吾口東方之人所二據以爲一其學問一之地者上也。嗚呼非二吾有二神助(38)一、其亦惡能得二若人一以友レ之也邪。會野先生有レ槩二乎世一、而將レ游二于洛一。予既不レ能二挽而留レ之(39)、乃從而慫二慂(40)之一曰、吾三數人者、何翅吾口東方之人邪、乃可二以往二天下一之人也。況其于レ洛邪、亦況吾關中之所二得而擅有レ之哉。且也世之

軒二輊(41)關・洛之學一者、則謂下洛者口共主(42)之居、寒暑風雨(43)之所會焉、山川秀麗(44)、土潔水冽、其民也斷斷(45)然、其君子也間暇(46)以樂、故其學、貴二周密(47)以詳緩一、其文章、悠然有中曠世之思(48)上。又謂下關中者興王之地(49)、元氣(50)之所二鬱勃(51)一焉、莽蒼(52)千里、負レ海抱レ原、其民也夸(53)、其君子也喜趨二事功一、故其學、貴三先立二其大者一(54)、其文章、渢渢乎(55)有中大國之音上。是皆孰下若崎之爲二萬國大都會一、而華風之所中漸靡(56)上也乎。要レ之聲字之學、二者未二之有レ聞焉。況先生者生二于崎一、學二于關一、今而往二于洛一、則天之牖二洛人一(57)、將下埤二益之一(58)以中二方之學上歟。先生去矣、洛下之書生之咏、行且擁二鼻(59)于先生一也。先生去矣、留二玄琴一張(60)一爲レ別。夫琴者、大雅之器也、將二以レ吾知レ音(61)歟。故吾亦言二聲音雅喭通別之旨一、以爲レ酬二其贈一。若二其戀戀(62)之情一、則請下爲二洛人一而割中之也已。

〔語　注〕

(1)史記・五帝本紀論贊〈百家言黃帝、其文不雅馴、薦紳先生難言之、…余幷論次、擇其言尤雅者〉。(2)孔子家語・好生〈君胡然焉〉。(3)(劉峻)辨命論〈觀窈眇之奇舞〉、(元好問)寄答商孟卿〈窈渺朱絃寂莫心〉。(4)莊子・胠篋〈足跡接諸侯之境〉、鹽鐵論・誅奏〈足迹之所及〉。(5)漢書・張繹之傳〈其幣徒文具、亡惻隱之實〉、宋史・朱熹傳〈夫六事者、亦將爲文具〉。(6)禮記・學記〈今之教者呻其佔畢〉。(7)孟子・離婁上〈人有恒言〉。(8)晉書・王衍傳〈妙善玄言、唯談老莊爲事、每捉玉柄麈尾、與手同色、義理有所不安、隨卽改更、世號口中雌黃〉、(成公綏)嘯賦〈隨口吻而發揚〉。(9)(王維)早入滎陽界詩〈因人見風俗、入境聞方言〉。(10)(賀知章)回鄉偶書詩〈響音無改鬢毛摧〉。(11)(杜甫)漫成詩〈讀書難字過〉。(12)爾雅・序〈夫爾雅者、所以通詁訓之指歸〉。(13)漢書・楊雄傳〈篇籍具存〉。(14)(韓愈)進學解〈周誥殷盤、佶屈聱牙〉。(15)法言・問神〈或問經之艱易〉。(16)禮記・儒行〈更僕未可終也〉。(17)孟子・梁惠王下〈無已則有一法焉〉。(18)史記・貨殖傳〈陳在楚夏之交〉、(王勃)滕王閣序〈臺隍枕夷夏之交〉。(19)

（白居易）送客遊嶺南詩〈牙檣連海舶〉、宋史・食貨志〈京東三路、商賈所聚、海舶之利、顓於富家〉。（20）（左思）吳都賦〈搜瓌奇〉、同前〈果布輻奏而常然〉。（21）史記・貨殖傳〈其民羯羠不均〉。（22）晉書・何曾傳〈性奢游、務在華〉。（23）史記・貨殖傳〈招致天下之喜游子弟〉。（24）後漢書・段熲傳〈長乃折節好古學〉、魏略〈折節學問〉。（25）南史・陸厥傳〈早識宮徵〉、（26）易・繫辭上・疏〈通曉于幽明之道〉。南史・韋鼎傳〈少通曉博涉經史〉。（27）詩・大明〈厥德不回、以受方國〉。（28）孟子・滕文公下〈引而置之莊嶽之間數年〉。（29）管子・內業〈思之思之、又重之思之而不通、鬼神將通之〉、（鄭符）奇松聯句〈來助碧雲吟〉。（30）易・豐〈闚其戶、闃其无人〉。（31）（班固）西都賦〈愕眙而不敢階〉。（32）竇希瑊碑〈靈星代稟間氣時鍾〉、春秋演孔圖〈正氣爲帝、間氣爲臣〉。（33）論語・憲問〈君子哉若人〉。（34）（杜牧）李賀詩序〈牛鬼蛇神、不足爲其虛荒幻誕也〉。（35）孝經〈口無擇言、身無擇行〉。（36）史記・孟子荀卿傳〈中國名曰赤縣神州〉。（37）莊子・齊物論〈萬世之後、而一遇大聖知其解者、是旦暮遇之也〉。（38）論衡・命祿〈富貴若有神助〉。（39）孟子・公孫丑上〈援而止之〉。（40）方言〈慫慂、勤也〉。（41）後漢書・馬援傳〈居前能令人輊、居後不能令人軒〉。（42）史記・楚世家〈夫弑共主、臣世君〉、漢書・諸侯王表〈天下謂之共主〉。（43）淮南子・墜形訓〈中央四達風氣之所通、雨霧之所會〉。（44）南史・陳武帝紀〈此地山川秀麗、當有王者興焉〉。（45）史記・魯世家〈洙泗之間、斷斷如也〉。（46）孟子・公孫丑上〈今國家閒暇〉。（47）荀子・儒效〈其知慮多當矣、而未周密也〉。（48）晉書・郄超傳〈卓勞不羈、有曠世之度〉。（49）晉書・劉隗刁協傳〈劉刁亮直志、奉興王〉、唐書・鄭裔綽傳〈同州太宗興王之地〉。（50）漢書・律歷志〈元氣轉三統五行之下〉。（51）漢武內傳〈雲彩鬱勃盡爲香氣〉。（52）莊子・逍遙遊〈適莽蒼者、三飡而反〉。（53）漢書・地理志下〈其俗夸者〉。（54）孟子・告子上〈先立乎其大者〉。（55）左傳・襄公二九年〈美哉、渢渢乎〉。（56）

史記・淮南衡山傳〈臣下漸靡使然也〉。(57)詩・板〈天之牖民〉。(58)詩・北門〈政事一埤益我〉。(59)晉書・謝安傳〈安本能爲洛下書生詠、有鼻疾、故其音濁、名流愛其詠而弗能及、或手掩鼻以斅之〉、(杜牧)折菊詩〈擁鼻自知心〉。(60)晉書・陶潛傳〈畜素琴一張〉。(61)禮記・樂記〈是故審聲以知音〉。(62)史記・范雎傳〈以綈袍戀戀、有故人之意〉。

野生の洛に之くを送るの序(1)

龍門子（司馬遷）は五帝の徳を記述するのにもっとも典雅な言辞を採用したというが、雅言・俗言が相違しているのは、かくも遠い昔からのことであった。後代の曼禺氏（方以智）の仲間になると「古代の俗言を現代では雅言と呼ぶ」と言うが、(2)はたしてそうであろうか。遙かに隔たる古代と現代とでも、声音は滞ることなく通じている。ところが、晁卿（安倍仲麻呂）は〔中国に渡ったまま〕帰国せず、他方〔帰国した〕備公（吉備真備）は〔声字の学を日本に〕伝えなかったから、(3)東方日本の学者は〔日本という〕歩いてゆける範囲内に安住して、「声字の学」はただの飾りと化してしまった。そのために日本の学者が文字をたよりに読むものは中国人が通常用いている文言だけとなり、宋代の儒者が「性命」をふりかざしたり明代の文士が口にまかせて説いた中には、地方の俗言がよくあるにもかかわらず、それを読み過ごして、〔わかりやすい〕柴桑翁（陶淵明）の詩のみを口ずさんでよしとしている。また『埤蒼』や『爾雅』などの五雅(4)に古文字の意味が記載されていることから、周の誥や殷の盤にみえる字句が〔韓愈の言に相違して〕難しくないといぶかしむ。このように難易を転倒させて、よいはずがない。先頃、わたしは『二十一史』を調べる機会を得た(5)が、六朝以後〔の史書〕には日常卑近の言辞が多くみられる。たとえば『宋史（宋書）』の「不耐煩」、『斉書』の「東西」、『梁書』の「楼羅」「透水」、『南史』『北史』の「笨」「子細」「功夫」といった類であるが、こうした例はきわめて多い。そこで〔中国のことを真

に学ぶために〕「崎陽（長崎）の学」が必要だとわたしは言いたい。

長崎は、諸外国との交易が行なわれて船舶や珍しい物資が集まる所であり、ここに通詞がいる。長崎の風俗は、野羊のごとく捷捍であり、贅沢かつ放埒である。それゆえ、こうした風俗に逆らって学問をする人は少ないが、音声を聞分けたり発音の仕方を知って外国語に通暁していることは、〔あの『孟子』にみえる〕莊や嶽〔という斉の都の繁華街〕に置かれた楚人と同様である。思えば、わたしの心だけはずっと以前から遠く離れた長崎に遊学していた。『管子』に「思い続けて諦めなければ神が助けてくれる」という言葉がある[6]が、〔まさしく〕「崎陽の学」を始めるにあたり、わたしは長崎の人鞍岡蘇山と知りあえた。ついで安藤東野を知ったが、東野は長崎の人石呉峰なる人物に学んでいた。また中野撝謙先生を知って友人とすることができたが、〔貴兄は〕長崎の人林蘿山氏の甥である[7]。この人々を訪ねて様子をうかがうと、衣服は日本人であっても談笑するさまは中国人そのものである。そこでわたしは、この広い日本の中でどんな気運が集まり働いてかくも秀れた人々が同時に生れてきたのか、と驚き思うのである。かれらの〔中国語〕学習では、『水滸伝』『西遊記』『西廂記』「明月[8]」などの類が中心であった。そこには、卑賤でみだらなことや荒唐無稽なことが載っているが、それを選別することもなく中国語であるからなんでもかんでも倣うのである。古代・現代〔の言語〕、雅言と俗言とを統一させて、声音の在り方を明らかにすることに最終的な目的があったからである。そして習熟して通暁すれば、大海の西にある赤県（中国）の人々と朝な夕なに会っているのも同然になる。こうしてこそ、中国人が難しいとする箇所を我々日本人も難しいと思い、易しいとする箇所は易しいと思うことができ、さきに述べたような〔難易の〕転倒は起こりようもない。そこで、東方日本の人々が学問をするために〔「崎陽の学」が〕必要な素地だと言うのである。思うに、本当に神の助けがなけれ

ば、〔貴兄を始めとする〕かくも秀れた人達を友人にできただろうか。

折から、貴兄は、世の中を嘆いて京都へ行こうとする。わたしは、それを引き止めることができず、そこで〔上京を〕勧めて、つぎのように述べよう——

《我が〔友〕三人は、東方日本に止まっている人ではなく、広い天下に通用できる人々である。だから〔貴兄が〕京都で通用するのもたやすいことであろう、なにしろすべてに盛んなこの江戸でも通用していたのであるから。世間の人々は江戸と京都の学問を比較して、つぎのように噂している。

「京都は、『共主（天皇）』の居所であり、ほどよい気候で風景も素晴らしく、とてもよい土地である。京都の人々は争い好きであるが、君子人は落着いた平安を楽しんでいる。そこで学問は厳密でありながらもゆったりとするのをよしとし、文章にも比類のないほど大きな思慮がある。江戸は、『興王（徳川将軍）』の土地であり、〔万物を生成する〕『元気』が沸起っており、海や平野があって広々としている。江戸の人々はおごりたかぶっているが、君子人は喜々として事の成果に向かっている〔ほど謙虚である〕。そこで学問は『大なるもの』の確立を優先し、文章にもほどよい大国の響きがある。」

しかし〔こうした京都・江戸も〕長崎が世界の大都会であり、中国の風俗に次第に感化されていることにはおよびもつかない。つまり「声字の学」が、まだ江戸・京都には〔本格的に〕起っていないからである。貴兄は、長崎に生れ、江戸で学問を修め、いま京都に行こうとする。これは、まさに天が、京都の人々を導くために長崎・江戸の学問を用いようというのであろう。貴兄が行けば、〔あの謝安の故事のように〕[9]ゆくゆくは京都の学者も貴兄を手本として倣うことになろう。上京にあたって貴兄は、黒塗りの琴一張を餞別として残していった。琴は風雅を嗜むための道具であり、わたしが音韻・音律についてよく知っているということであろう。そこで、わたしも、声音や雅言・俗

言の異同について述べて、謝礼の言葉を返すのである。もしも、貴兄にわたしを懐かしむ気持ちがあるならば、その心遣いは京都の人々に与えて欲しいとお願いする。》

〔訳　注〕

(1)　この「送野生之洛序」の成立については不確定な要素もあるが、ここでは平石直昭氏の考証に従って、宝永三（一七〇六）年とする。なお、『東野遺稿』（中）所収の「送野搗謙往京序」には、上京した中野搗謙について「為年四十矣」とあり、享保五（一七二〇）年に五十四歳で没したことから逆算すると、この年と合致する。

(2)　方以智（一六一一～一六七一）には『通雅』があり、江戸中期以降にかなりの影響を与え、例えば、新井白石は享保四（一七一九）年に『東雅』を著している。ただし、ここで徂徠が方以智の仲間として誰を指しているのかは未詳。

(3)　徂徠は、吉備真備について「和訓」を始めたとして非難しており、例えば『学則』の第一則には「有黄備氏者出、西学於中国、作為和訓以教国人」とある。また、「和訓」の弊害については『訳文筌蹄』題言の第二則に詳しく述べられている。この「送野生之洛序」においても、こうした「和訓」を批判する議論と共通した意識をうかがうことができる。

(4)　『埤蒼』は魏の張揖が撰述したもの。「五雅」は、『爾雅』『小雅』『逸雅』『埤雅』『広雅』のこと。

(5)　柳沢藩蔵版「二十一史」の計画があり、このうち『晋書』『宋書』『南斉書』『梁書』『陳書』が、元禄十三（一七〇〇）年から宝永三（一七〇六）年にかけて刊行された。この事業に徂徠が関与していたことは、よく知られている。

(6)　この『管子』内業篇の言辞は、前述の『学則』の第一則にも「思之又思、神其通之」と引用されている。また『荘子』斉物論篇の「旦暮遇之」も『学

則』の第一則にみえており、この「送野生之洛序」と『学則』第一則との密接な関連が推測できよう。

(7) 鞍岡蘇山、名は元昌、は書家として知られているが、徂徠の同僚として柳沢家に仕えており、寛延三（一七五〇）年に七十二歳で没した。安藤東野、名は煥図、は徂徠の門人として有名であるが、享保四（一七一九）年に三十七歳で没している。安藤東野が唐音を習ったとされる石呉峯氏なる人物については、石原鼎庵という説もあるが疑わしく、いかなる人物であったかは不詳。中野撝謙、名は継善、は牧野成貞に仕えており、また安藤東野・太宰春台が徂徠に入門する以前の師でもあった。林蘿山、名は応采、別号は道栄、は長崎の唐通詞でもあり、宝永五（一七〇八）年に六十九歳で没している。

(8) 「明月」は未詳。あるいは『明珠記』の誤りか。

(9) 『晋書』謝安伝に、謝安は詩文の咏唱に勝れていたが、それは鼻疾に由来するものだったから、人々は鼻を手で覆って真似たという故事がみえる。

（澤井）

次公字敍贈行

周藩諸生(1)縣文孺次公之載レ贄(2)來見(3)也、人或覘二其刺一、嗤二笑質俚(4)無レ文(5)者一、則相謂曰、子生三月、其父咳名レ之(6)。二十弱冠(7)、迺賓命二之字一(8)。名字之相爲レ耦、其在二闕里(9)之門一、囘淵、損騫、商夏、賜貢、偃游、是皆文屬辭比(10)、義於レ是乎取レ諸、冀レ足二以飾二其父之志一(11)、自レ古之道也。若下夫世之稱二長公・次公一者上、率從二旁名一、道二其兄弟行一、而相貴重乎爾、是可二以爲レ字與、三加(12)之時、冠辭謂二其何一。彼己氏(13)非二西鄙人(14)一邪。夫其鄰里州黨(15)、宜若莫レ有二以爲レ賓焉者一耳。文孺則病レ之、求二解於予(16)一。蓋班史有レ之、而黄・蓋兩次公者最著。雖下宋時徹二梁氏之子一、叚使不上識二其爲レ覇爲二寛饒一、而獨不レ識レ爲二漢人一邪。故曰、次公者漢人之字也。今文孺之從レ予學二

古文辭一、其亦學爲二漢人一哉。三代之後唯漢、漢唯二司馬。[17]當二其時一、蜀方鄉二文翁之化一[18]、而河・汾違二龍門一[19]、不レ遠、培植之厚、實生二異人一。[20]是莫レ有下鄉薦紳先生[21]爲レ之冠レ字、祝贊相命、[22]務嘉美二張大乎其所一[23]由名一、以昭二明[24]夫成人之行一、使二其父兄宗族驩聽而樂レ道之者上邪。[25]顧其爲二子長・長卿一、迺何取二乎遷與一[26]相如一、亦莫レ所レ怪二於次公一焉。故曰、漢人之俗爲レ然也。近世學士家、棄二[27]蔑本藝一、唯末流是沿、[28]帖括剽竊、[29]旁二引佛・老一、[30]語足二以嚇レ人、其稍自意者、[31]亦甘爲二歐・蘇奴隸一、[32]而不レ知二史・漢何物一、問或二三及レ之、則諉曰、童丱時受二讀塾中師一、亦曰、樸學耳。[33]且識二古人姓名一、[34]何益二於文章一哉。[35]伺二其鼻間一栩栩然。[36]是以毋二以怨二其牽胥嘗笑一也。[37]夫周者、山以南一都會也。[38]自下內藝興之用以伯二西諸侯一、[39]乃心二王室一、勞徠弗レ怠、[40]宿儒耆卿、[41]抱二蜀典籍一、[42]盍歸乎來。[43]於レ是乎弦歌之聲、[44]聞二乎四境外一。[45]文氣攸レ蒸、[46]門司・赤馬、異璞產レ研、[47]風人騷士、[48]往往乎出、[49]以至レ今弗レ衰。[50]且也今藩主其先非二江氏苗裔一乎、[51]其亦得レ非下世受二司馬氏言一以爲二大學西曹主一者上乎。[52]雖レ然、吾未レ識下其鄉薦紳先生能爲二漢人學一乎否上也。[53]吾識レ之自二文孺一始。[54]文孺爲レ人也質直、[55]其於二漢人一也爲レ近。[56]雖レ然、吾不レ願下其如二黃・蓋兩次公一、通二於世務一、[57]明二習文法一、以二經術一潤二飾吏事一、[58]若レ寬若レ嚴、奉レ使稱レ意、[59]所レ至有中循良聲上也。[60]富貴無レ常、忽則易レ人、[61]身在二下僚一、[62]言迺千秋。[63]雖レ有二循吏一、不レ有二良史一、[64]是何以傳焉。[65]故吾迺願二其能爲二司馬氏一也。[66]古人曰、子長之文、質而不レ俚。文孺之爲レ人、其斯爲二最近一哉。故吾由二次公一及レ之。今文孺之從レ予學二古文辭一且三年、業成將レ歸。故書以當二君子之贈一。文孺、其勉レ之哉。

〔語　注〕

(1)史記・曹相國世家〈盡召長老諸生〉、(韓愈)進學解〈晨入太學、招諸生立館下〉。(2)孟子・滕文公下〈出疆必載質〉。(3)白虎通・文質〈大小國諸侯皆來見〉。(4)漢書・司馬遷傳贊〈質而不俚〉。(5)左傳・襄公二五年〈言之無文〉。(6)禮記・內則〈三月之末、擇日剪髮爲鬢、…是日也、妻以子見於父、…父

執子之右手、咳而名之〉。(7)禮記・曲禮〈二十曰弱、冠〉。(8)儀禮・士冠禮〈冠者立于西階東、南面、賓字之〉。(9)孔子家語・七十二弟子解〈孔子始教學於闕里〉。(10)禮記・經解〈屬辭比事、春秋教也〉。(11)論語・學而〈父在觀其志〉。(12)禮記・冠義〈醮於客位、三加彌尊、加有成也〉、孔子家語・冠頌〈三加彌尊、導喻其志、冠而字之敬其名也〉。(13)詩・揚之水「彼其之子、不與我戍申」鄭箋〈其或作記、或作己、讀聲相似〉、左傳・文公十四年〈齊公子元不順懿公之爲政也、終不曰公曰夫己氏〉。(14)書・牧誓〈逖矣、西土之人〉、(司馬相如)子虛賦〈臣楚國之鄙人也〉。(15)論語・雍也〈以與爾隣里鄉黨乎〉。(16)史記・孟嘗君傳〈孟嘗君使人抵昭王幸姬求解〉。(17)(王世貞)詩〈漢朝兩司馬、我一代攀龍〉。(18)漢書・循吏傳〈至今巴蜀好文雅、文翁之化也〉。(19)宋史・盧秉傳〈材木、非培植、根株弗成〉、金史・韓企先傳〈培植奬勵後進〉。(20)漢書・公孫弘卜式兒寬傳贊〈群士慕嚮、異人並出〉。(21)史記・五帝本紀贊〈薦紳先生難言之〉。(22)公羊傳・桓公三年〈胥命者何、相命也〉。(23)後漢書・鄧騭傳〈猥推嘉美、並享于大封〉、論衡・案書〈道德政治可嘉美也〉。(24)(韓愈)送楊少尹序〈太史氏又能張大其事〉。(25)書・堯典〈平章百姓、百姓昭明〉。(26)禮記・冠義〈已冠而字之、成人之道也〉。(27)漢書・東方朔傳〈上大驩樂〉、史記・楚世家〈莫敢不樂聽、則王名成矣〉。(28)儀禮・喪服〈大夫及學士〉、史記・儒林傳〈天下之學士靡然鄉風矣〉。(29)國語・周語下〈不共神祇而蔑棄五則〉。(30)漢書・司馬遷傳〈惟漢繼五帝末流〉、後漢書・班彪傳〈故其末流有從橫之事〉。(31)唐書・選學志〈明經者、但記帖括〉。(32)(楊廉)夢蛙賦〈老聃蛙鳴、道德剽竊〉。(33)(杜牧)與人論諫書〈旁引曲釋〉。(34)史記・魏其傳〈沾沾自喜耳〉、漢書・賈誼傳〈遇之有禮、故群臣自憙〉。(35)顏氏家訓・勉學〈厮役奴隸〉、晉書・劉元海載記〈晉爲無道、奴隸御我〉。(36)顏氏家訓・勉學〈蠻夷童丱〉、晉書・慕容廆載記〈廆童丱時、往謁之〉。(37)漢書・儒

林傳〈吾始以尙書爲樸學〉。(38)世說新語補・言語〈何必識姓名、然後知美〉。(39)史記・儒林傳〈文章爾雅〉、漢書・公孫弘卜式兒寬傳贊〈文章如〉。(40)莊子・田子方〈今視子之鼻間栩栩然〉。(41)史記・貨殖傳〈然邯鄲亦漳河之間一都會也〉。(42)(王世貞)日本志〈左京兆大夫內藝興遣宋設貢、咸强請勘合〉。(43)孟子・離婁上〈伯夷辟紂、居北海之濱、聞文王作興曰、盍歸乎來、吾聞西伯善養老者〉。(44)書・胤征〈爾衆士、同力王室〉、(庾信)哀江南賦〈袁安之每念王室〉。(45)漢書・循吏傳〈今膠東相成、勞來不怠〉。(46)漢書・翟方進傳〈是時宿儒有淸河胡常、與方進同經〉。(47)管子・形勢〈抱蜀不言〉。(48)左傳・昭公十五年〈司晉之典籍〉。(49)前注(43)參照。(50)論語・陽貨〈聞絃歌之聲〉。(51)孟子・公孫丑上〈雞鳴狗犬相聞、而達乎四境〉。(52)後漢書・桓榮傳贊〈風人所以興歌〉、文選序〈騷人之文、自玆而作〉。(53)漢書・劉歆傳〈天下衆書往往頗出〉。(54)史記・司馬穰苴傳〈司馬穰苴者、田完之苗裔也〉。(55)論語・學而〈其爲人也、孝弟而好犯上者、鮮矣〉。(56)漢書・循吏傳〈三人皆儒者、通於世務、明習文法、以經術潤飾吏事、天子器之〉。(57)漢書・蓋寬饒傳〈奉使稱意〉。(58)(柳宗元)・柳州謝上表〈必藉於循良〉。(59)漢書・蓋寬饒傳〈富貴無常、忽則易人〉。(60)後漢書・班固傳〈得及明時、秉事下僚〉、(左思)詠史詩〈英俊沈下僚〉。(61)戰國策・齊策〈爲儀千秋之祝〉。(62)史記・太史公自序〈奉法循理之吏、不伐功矜能、百姓無稱、亦無過行、作循吏列傳〉。(63)左傳・宣公二年〈董狐古之良史也〉。(64)漢書・司馬遷傳贊〈然自劉向揚雄博極群書、皆遷有良史之材、服其善序事理、辨而不華、質而俚、其文直、其事核、不虛美、不隱惡、故謂之實錄〉。(65)世說新語・文學〈及玄業成辭歸、既而融有禮樂皆東之歎〉。(66)晏子春秋・內篇雜上・曾子將行晏子送之而贈以善言〈君子贈人以軒、不若以言〉、孔子家語・觀周〈老子送之曰、吾聞富貴者送人以財、仁者送人以言〉。

次公の字に叙して行くに贈る[1]

周防（長州）藩の学生、県文孺次公[2]がわたしのもとへ入門すべく面会に来たとき、名刺を覗き見したものがいた。かれらは〔「次公」という字の〕洗練さに欠けているのを嘗笑し、こう言い合った。

「〔礼には〕子が誕生して三月の後、父は子をあやしてその名をつけ、二十歳のとき〔の加冠の式のさい〕に賓客が字をつける〔とある〕。名と字とは互いに関連しており、たたとえば孔子の門にあっては顔回の字は子淵、閔損は子騫、卜商は子夏、端木賜は子貢、言偃は子游となっている。これらはみな関連ある語をつらねたのである[3]。字〔に用いられた語〕の意味は、こうして名〔に用いられた語〕の意味を受け、父の〔命名の〕志をさらに輝かさんとする、これが古代からのやり方である。一般に「長公」とか「次公」とか称するのは、生まれた順に従って名づけ、兄弟世代間の相互関係を明らかにするためであり、〔「公」とあとにつけるのは〕たがいに敬称をつけあっているだけなのだ。これを字と考えることはできない。〔もしそうした字であれば〕加冠の儀式のさい、式辞で〔命字の説明について〕何と述べたらよいのであろうか。あいつは、あるいは西方の鄙人ではないのか。その郷里には、おそらく〔加冠の儀式のさい〕賓客となるものがいないのではなかろうか」と。

文孺は当時これに悩み、わたしの見解を求めて来た。

漢書によれば、黄覇・蓋寛饒の二人の「次公」が最も著名ではあるが、他にも「次公」の字を持つものは数多くいる。宋代において、もし梁氏の子（梁適）がいなければ、何次公なるものの字が黄覇・蓋寛饒のそれを襲っていることはわからなかったのだが、しかし「次公」なるものの字が誰にせよ漢人の字らしいことは、わかっていたのではないか[4]。そこで「『次公』なる字は、漢人の字である」と教えたのだ。

今、文孺はわたしについて古文辞を学んでおり、〔字ばかりでなく〕学問もまた漢人の学問だといえる。

三代より以降は、ただ漢代だけが価値ある時代だ。漢代でも、ただ司馬相如・司馬遷の二人だけが、傑出した人物である。〔相如の出生地〕蜀は文翁の教化によって文明の洗礼を受け、〔中原の地である〕河汾の地は〔司馬遷の出生地である〕龍門から遠くはない。土地の文化の厚みは、優れた人材を生むものだ。〔この地域に〕加冠と命字の儀において、その名のいわれを賛美伸長し、成人としての在り方を〔字によって〕明らかにし、両親や親族が喜んで聞き、楽しんで口にする、〔こうした字のつけられる〕学者がいないわけはない。しかし、考えてみると、〔遷の字が〕「子長」、〔相如の字が〕「長卿」となっているのは、「遷」や「相如」との関連で採られたわけではない。とすれば、やはり「次公」なる字〔が名と関連していないとしても〕何の不思議もない。そこで「漢人の風俗はそうなのである」と教えたのだ。

最近の学者は本質的学問を軽んじて棄て去り、非本質的な末流にばかり心を寄せる。丸暗記と剽窃、仏老の書をあまねく引用し、他人を驚かせれば、それで満足している。やや気取っているものもまた、欧陽修・蘇軾の奴隷となって、史記・漢書の何たるかを知らず、ときおり一、二の内容に言及すると「子供のころ、講読を塾の先生から受けたことがあるにすぎない」と言い訳したり、「鄙びた古臭い学問にしかすぎない。古人の姓名を覚えることなど、文章の上達に何の益があろうか」などと悠然とした表情で述べたりしている。〔そうした連中に〕訾笑されたりしたからといって怨むことなどないのだ。

そもそも周防は山陽道以南の文化の中心地である。内藝興（大内義興）が西国の諸侯に覇を唱え、王室のことを心にかけ、勤労して怠らなかったので、それを耳にした優れた学者・公卿たちは典籍を抱き、「早く行き身を寄せよう」と言いつつ周防に赴いた。かくて周防では、文化がはるか国外にまで鳴り響くこととなった。文運の気が自ずと醸し出すからであろうか、門司や赤馬（下関）では、珍貴な璞から硯がつくられる

ように、詩人たちが次々と現れ、今日にまで続いている。さらにまた、今の藩主（毛利氏）は大江氏の子孫であるが、かの司馬遷の言にならい、[5]〔大江氏の〕「大学西曹の主」たる地位を継承しているのではなかろうか。[6]とはいうものの、わたしはいまだその地方の学者たちが、漢人の学を修めているか否かを知らなかったのだが、文孺の存在によって、漢人の学がその地に本格的に根づくのはたしかであろう。文孺の人となりは、素朴で正直、漢人に近いものを持っている。しかしながらわたしは、文孺が同じく「次公」という字をもつ黄覇・蓋寛饒の二人のごとくに世務に通じ、法律に習熟し、経術をもって行政事務を潤飾し、あるいは寛大であり、あるいは厳格であり、その職務を奉じて主君の意に称い、至る所で循良の評判が高い、といった人物になることを願ってはいない。〔高官になったとしても〕富貴は常なきもの、たちまちにして他人へ移ってしまう。それにひきかえ、低い身分の役人であったとしても、言辞は不朽である。たとえ循吏がいても良史がいなければ、その名は〔後世には〕伝ってはいかない。かくてわたしは、文孺が司馬遷のごとき秀れた史官になることを願うのである。古人は「子長の文は質朴であり、しかも鄙びてはいない」と評しているが、文孺の人となりは、最もそれに近い。故にわたしは「次公」という字のことから、こうしたことにまで言及したのだ。今、文孺はわたしに従って古文辞を学んで三年になろうとし、成果もあがって、まさに周防に帰らんとしている。そこで文章を書き記し、君子にふさわしい送別の贈り物とする。文孺よ、大いに勉学に励んでほしい。

〔訳　注〕

(1)　宝永五（一七〇六）年春の作（平石直昭『荻生徂徠年譜考』による）。

(2)　山県周南、名は孝孺また文孺とも。通称少助、字は次公、周南と号す。周防の人。長州藩藩儒山県良斎の次男として貞享四（一六八七）年に生まれ

る。一九歳のとき江戸へ出て、徂徠に師事、従学すること三年、長州藩に仕え、天文二（一七三七）年明倫館の学頭祭酒となった。宝暦二（一七五二）年没。

（3）名字の関連について『徂徠先生文集解』は次のように説明する。

まず、顔回については

通志曰、回古雷字也。今借為回旋之回。説文从口中象回転之形。徐鍇曰、渾天之気、天地相成。天周地外、陰陽二気、回転其中也。字彙、淵水盤旋処為淵。是回読為旋、淵亦為旋。回淵字義相同為対。

関損については

字彙曰、損失也。騫取也。与搴同。是損読為失、騫読為取。損騫字義相反為対。

卜商については

説文商以外知内也。徐鍇曰、商略之也。以内知外、言不出也。字彙曰、夏大也。是商読為略、夏読為大。商夏字義取略大之義。

端木賜については

字彙曰、上予下曰賜、下献上曰貢。是賜貢字義互取義。

言偃については

字彙曰、偃与堰同。壅水也。游、浮行也。是偃游字義取堰水浮之義。

（4）『宋史』巻二八五・列伝四四梁適の伝に

嘗与同院燕肅奏何次公案、帝顧曰、次公似是漢時人字。肅不能対。適進曰、蓋寛饒・黄覇皆字次公。

とある。ここの記述は、『宋史』のこの部分に基づいているだろう。なお原文中に梁適を指して「梁氏の子」としているのは同伝に、

梁適字仲賢、東平人、翰林学士顥之子。少孤、嘗輯父遺文及所自著以進。真宗曰、梁顥有子矣。

とあるのに基づいているだろう。

釈義端『徂徠集便覧』は、『琅邪代酔編』を引いて

いるが、そこでは梁適ではなく、麗荘敏が、指摘したことになっており、徂徠が、これに基づいたとは考えにくい。

また『野客叢書』は、同じく指摘者を麗荘敏としているものの、黄覇の「次公」なる字の由来についての「覇は王に次ぐから『次公』とした」というの麗の見解に反対して、次のように述べる。

僕考漢人字次公之意、為其兄弟間、居其次者如云仲卿次君耳。麗謂覇次王鑿矣。

徂徠の「次公」なる字が兄弟間の順序を示すものだとした見解と、一致するが、徂徠の見解がこれに基づいたとはにわかには断定できない。

(5) 『史記』太史公自序は次のようにいう。

当周宣王時、失其守而為司馬氏。司馬氏世典周史。

(6) 大江氏が維時以来掌ったのは、西曹ではなく、東曹である。

(岡本)

敍二江若水詩一

予誦二江翁詩一、而後知下口神祖之深仁厚澤(1)入二於民一者至浹洽(2)上也。吾樽桑文明(3)之運(4)、方今如二日再中一(5)也。間嘗竊揚(6)二搉(7)詩所二繇隆降一論二其世一(8)、則寧・平之際、於レ斯爲レ盛(9)。其名公鉅卿(10)、相與賡(11)二歌乎本朝之上一、所レ爲下潤二色鴻業(12)一、黼中黻(13)王猷(14)上者、野篁・藤常嗣之倫、皆渢渢乎(15)治世音哉(16)、則山澤列仙之儒(17)、亦有レ若(18)二民黒人・西山隱士輩一、其嘯傲(19)呻唫(20)之聲、時時聞二乎人間一(21)者、蓋庶二幾乎東方・陶・韋之流亞(22)一云。雖レ然當二是時一、上以取レ士(23)、下以資レ仕(24)、務爲二名高一、厚利隨レ之(25)、是其所レ爲二詩之教(26)一、在レ彼不レ在レ此(27)焉。是其詩而隱者、抱下所二由顯一者上以藏焉、則豈莫レ有二不平鳴(28)一于幾微之間一邪。是其所レ尚、卽上之所レ好焉、則長慶之流響(29)、日以卑矣、是以詩之亡(30)也。數百千載、降而之二國風一也。亦數百千載、蟲蟲(31)翁翁、莫レ有乎爾(32)。皆詩之權在レ上故也。今希レ世(33)

求レ進者、則輒相謂曰、薄海[34]之内、短後[35]急裝[36]、曳二長劍[37]一、躍二怒馬[38]一者、滔滔皆是。[39]吏以爲レ師[40]、奉二三尺[41]一武斷[42]舍是非二君子一也、則擠レ藻如二春葩一、奚益二於殿最[43]一哉。有二王人者一焉、有二侯伯者一焉、有二公士大夫者一焉、有二陪臣士者一焉、有二民人者一焉。族類[44]風別、賤不レ可二以貴一、而農・賈之子、恒爲二農・賈[45]一也。叚使上之人、由レ詩觀二其志[46]一、下者登高能賦雖二李・杜復生[47]一、不レ可レ爲二大夫[48]一也、則今之時、非二言レ詩之時一矣。雖レ然、百年昇平[49]、文恬武熙[50]、素封樂レ業[51]、老身長レ子[52]、率多二暇日[53]一、莫レ有レ所レ使レ之[54]、而下有二所レ好レ之者一[55]、帝之力、于レ我何有哉[56]。於レ是有二錦里夫子者出一、而搏桑之詩皆唐矣。方今君美龍二擧於東都一[57]、師禮虎二視於北陸一[58]、林叟鬱二然於海西一[59]、伊・鳥聯二美於中州一[60]、雖二其言人人殊[61]、粹折不レ同[62]、要レ之皆聞二其風一興起[63]者、權在レ下也。故吾曰、文明之運、有二往而還一[64]、如二日再中一也。雖レ然、是皆世所レ謂薦紳先生[65]者、廼猶且或疑二於其爲二名高一者也。吾獨誦二江翁詩一、而後知レ有二眞好レ之也。翁名兼通、字子徹。其先世有レ操二計倪者術一、謂下津南四方之中[66]以居レ之、數頃田種レ秫[67]者半レ之、環漑以二貧水[68]一、汲二其清一爲レ酒、洌且美、聲鄉[69]日聞二近遠一、遂以致中千金之富上[70]、廼命二其鄉一。及レ至二翁之好レ詩、是寧有レ所加二厚其利一哉[71]。年未レ强[72]而屬二家政[73]其子一、取二其所二得贏[74]一、益斥二買異書一、以自娛。尚且歲一來二東都一、雖レ眎二會計[76]一乎、雜二處保豎[77]中一、儳然[78]駭然罷去、是併二與其所レ利忘レ之也。雖レ然、使二其有二朝夕之虞[82]、廢居之勤[83]一、亦安能大展二力[84]於其所レ好哉。故吾以レ翁名レ之。其爲レ詩也、莫レ有二耿介[85]處士[86]之風一、廼能种二澹其辭[87]一、翦二槮[88]其趣一、儁永乎其味レ之也、莫レ有二游間公子[90]之好一、廼能樂二其利一安二其分一[92]、優猶乎其言レ之也、其調雖未レ得下超二中晚一而上上之、廼能句而順、字而協、髣髴[94]乎唐音也。是誠莫レ有レ所レ使レ之、而亦有二所レ使レ之者一乎。故吾曰、口神祖之深仁厚澤入二於民一者爲レ爾。其行也、謁レ予求二詩敍一。夫高明炎炎[95]、燕之巢二其幕一[96]、鬼之所レ瞰、而爲二山林一[97]者弗レ近焉。傴乎僂乎、循墻而走[98]、邦國之士、爲二廊廟[99]者賤焉。是非二翁之嚮慕[100]一、而亦莫レ有二蔕芥乎胸中一[101]、以二好者在一也。且也

嚮所稱道[102]數君子者、吾未識其人、而能識其詩、雖則或嫌乎藉重以名高者、是亦所以爲吾之好從翁之好[103]者、且足以爲贈邪。

〔語　注〕

(1)(孟郊)南陽公請東櫻桃亭子春讌詩＜我公布深仁＞、(虞世南)奉和幸江都應詔詩＜厚澤潤凋枯＞、輟耕錄＜此亦深仁厚澤涵養所致＞。(2)荀子・儒行＜盡善浹洽之謂神＞、漢書・禮樂志＜於是敎化浹洽、民用和睦＞、(司馬相如)封禪文＜休烈浹洽＞。(3)淮南子・覽冥訓＜朝發榑桑＞。(4)易・乾・文言＜見龍在田、天下文明＞。(5)史記・封禪書＜平又言臣候日再中、居頃之、日卻復中＞。(6)大學章句＜間嘗竊取程子之意以補之＞。(7)莊子・徐无鬼＜可不謂有大揚搉乎＞、漢書・敍傳＜揚搉古今、盛世盈虛＞。(8)孟子・萬章下＜是以論其世＞。(9)論語・泰伯＜唐虞之際、於斯爲盛＞。(10)漢衢州徐偃王碑＜名公鉅卿＞。(11)書・益稷＜乃賡載歌＞。(12)(班固)兩都賦＜興廢繼統、潤色鴻業＞。(13)(韓愈)乞巧文＜黻黻帝躬＞。(14)詩・常武＜王猶充塞＞、(張華)女史箴＜家道以正、王猷有倫＞、晉書・桓豁傳＜論道作弼、王猷以之時邕＞。(15)左傳・襄公二九年＜美哉、渢渢乎＞。(16)禮記・樂記＜治世之音、安以樂其政和＞。(17)漢書・司馬相如傳＜列僊之儒、居山澤之間＞。(18)書・君奭＜有若伊尹＞。(19)(陶潛)雜詩＜嘯傲東軒下、聊復得此生＞。(20)莊子・列禦寇＜呻唫裘氏之地＞。(21)(李白)山中問答＜別有天地非人間＞。(22)晉書・桓溫傳＜晉宣王之流亞也＞。(23)孟子・告子下＜取士必得＞。(24)(柳宗元)誅文＜道不苟用、資仕乃揚＞。(25)韓非子・說難＜所說出於爲名高者也、而說之以厚利＞。(26)禮記・經解＜溫柔敦厚、詩敎也＞。(27)史記・酷吏傳＜由是觀之、在彼不在此＞。(28)(韓愈)送孟東野序＜大凡物不得其平、則鳴＞。(29)(傅玄)雜詩＜流響歸空房＞、(虞世南)蟬詩＜流響出疎桐＞。(30)孟子・離婁下＜王者迹熄而詩亡＞。(31)書・呂刑＜民興胥漸、泯泯棼棼＞。(32)孟子・盡心下＜然而無有乎

爾、則亦無有乎爾〉。(33)莊子・讓王〈希世而行、比周而友〉。(34)書・益稷〈外薄四海、咸建五長〉。(35)莊子・說劍〈短後之衣〉。(36)漢書・趙充國傳〈將軍急裝〉。(37)漢書・蓋寬饒傳〈冠大冠、帶長劍〉。(38)史記・蔡澤傳〈躍馬疾驅〉、後漢書・第五倫傳〈皆鮮車怒馬〉。(39)論語・微子〈滔滔者天下皆是也〉。(40)史記・李斯傳〈若有欲學者、以吏爲師〉。(41)漢書・杜周傳〈君爲天下決平、不循三尺法〉。(42)史記・平準書〈或至兼幷豪黨之徒、以武斷於鄉曲〉。(43)(班固)答賓戲〈馳辯如濤波、摛藻如春華、猶無益於殿最也〉。(44)左傳・成公四年〈非我族類其心必異〉。(45)國語・齊語〈是以商之子、恒爲商、…是故農之子、恒爲農〉。(46)左傳・襄公二七年〈請皆賦以卒君貺、武亦以觀七子之志〉。(47)史記・范雎傳〈雖舜禹復生、弗能改已〉。(48)漢書・藝文志〈登高能賦、可以爲大夫〉。(49)漢書・梅福傳〈升平可致〉、(韓愈)賀慶雲表〈昇平之符既兆〉。(50)(韓愈)平淮西碑〈相臣將臣文恬武嬉〉。(51)史記・貨殖傳〈今有無秩祿之奉、爵邑之入、而樂與之此者、命曰素封〉。(52)史記・律書〈文帝時、…人民樂業〉、漢書・食貨志〈故民皆勸功樂業〉。(53)文選序〈餘監撫餘閑、民多暇日〉。(54)孟子・梁惠王下〈行或使之、止或尼之〉。(55)孟子・滕文公上〈上有好者、下必有甚焉者矣〉。(56)史記・五帝本紀〈帝力于我何有哉〉。(57)淮南子・天文訓〈虎嘯而谷風至、龍擧而景雲屬〉。(58)易・頤〈虎視耽耽〉、(班固)兩都賦〈周以龍興、秦以虎視〉。(59)莊子・天下〈巋然而有餘〉。(60)史記・司馬相如傳〈世有大人兮、在于中州〉。(61)史記・曹相國世家〈諸儒以百數、言人人殊〉。(62)荀子・儒効〈舍粹折無適也〉。(63)孟子・盡心下〈故聞伯夷之風者、…聞柳下惠之風者、…莫不興起〉。(64)(韓愈)送李愿歸盤谷序〈如往而復〉。(65)史記・五帝本紀〈薦紳先生難言之〉、同・司馬相如傳〈耆老薦紳先生之徒二十有七人、儼然造焉〉。(66)史記・貨殖傳〈朱公以爲陶天下之中、諸侯四通、貨物所交易也〉。(67)晉書・陶潛傳〈乃使一頃五十畝種

秫〉。(68)周禮・考工記・匠人〈凡行奠水、磬折以參伍〉。(69)書・酒誥〈弗惟德馨香〉、(王融)游仙詩〈遠翔馳聲響〉。(70)史記・貨殖傳〈陶朱公十九年中三致千金〉。(71)史記・蘇秦傳〈燕王知之、而事之加厚〉。(72)禮記・曲禮〈四十曰强而仕〉。(73)(庾信)侯莫陳君夫人竇氏墓誌銘〈君子朝端、賢才家政〉。(74)史記・貨殖傳〈然其贏得過當〉。(75)史記・貨殖傳〈烏氏倮畜牧、及衆斥賣〉。(76)孟子・萬章下〈孔子嘗爲委吏矣、曰會計當而已矣〉。(77)國語・齊語〈四民者、勿使離處〉。(78)禮記・表記〈君子不以一日、使其躬儳焉〉。(79)(司馬相如)子虛賦〈礧石相擊、琅琅磕磕〉、(李充)弔嵇中散文〈絕琅琅之金聲〉。(80)(蘇軾)重寄詩〈好詩衝口誰能擇〉。(81)史記・酈食其傳〈吾高陽之酒徒、非儒生也〉。(82)左傳・昭公三年〈朝夕得所求、小人之利也〉。(83)史記・平準書〈轉轂百數、廢居居邑〉。(84)魏志・杜恕傳〈此熊虎之士、展力之秋也〉。(85)楚辭・九辯〈獨耿介而不隨兮〉、後漢書・逸民傳〈處子耿介差興卿相等列〉。(86)孟子・滕文公下〈處士橫議〉、荀子・非十二子〈古之所謂處士者、德盛者也〉。(87)荀子・非十二子〈神禪其辭〉、同・楊倞注〈神禪、當爲沖澹〉。(88)(司馬相如)上林賦〈紛溶箭蓼〉。(89)漢書・蒯通傳〈亦自序其說、凡八十一首、號曰儁永〉。(90)史記・貨殖傳〈游閑公子、飾冠劍、連車騎、亦爲富貴容也〉。(91)禮記・大學〈小人樂其樂、而利其利〉。(92)(蘇軾)林子中以詩寄文與可及余與可既歿追和其韻詩〈胡不安其分、但聽物所誘〉。(93)荀子・正論〈皆使當厚優猶知足〉。(94)楚辭・九章〈存髣髴而不見兮〉、漢書・敍傳〈未得其髣髴〉。(95)(楊雄)解嘲文〈炎炎者滅、隆隆者絕、觀雷觀火、爲盈爲實、天收其聲、地藏其熱、高明之家、鬼瞰其室、攫拏者亡、默默者存、位極者高危、自守者身全〉。(96)左傳・襄公二九年〈夫子之在此也、猶燕之巢于幕之上〉。(97)晉書・嵇康傳〈故有處朝廷而不出入、山林而不反之論〉。(98)左傳・昭公七年〈故其鼎銘云、一命而僂、再命而傴、三命而俯〉。(99)史記・貨殖傳〈賢人深謀於廊廟、論議

朝廷〉。(100)魏志・陳留王奐傳〈文告所加、承風響慕〉。(101)(司馬相如)子虛賦〈其於胸中、曾不帶芥〉。(102)韓非子・說疑〈稱道往古、使良事沮〉。(103)論語・述而〈子曰、富而可求也、雖執鞭之士、吾亦爲之、如不可求、從吾所好〉。

江若水の詩に叙す

江翁（入江若水）[1]の詩を読むと、神祖（徳川家康）が民人に与えた深い慈愛や恩恵があまねくゆきわたっていることがわかる。我が国の文明の変遷において、現在は太陽が再び中天にあるように盛ん〔な文明〕である。

ここで〔我が国における〕詩の盛衰を取上げて各時代を論ずれば、寧楽(奈良)・平安の時代が最も盛んであった。著名な公卿たちが詩をつぎつぎに作っては天子の政道を誉め称えており、小野篁や藤原常嗣[2]たちの詩にはよく治められた世の中の響きがある。世俗を離れた者には民黒人や西山隱士[3]などの人々がいて、ときには詩を詠ずる世俗を超越した声が世間に聞こえてくることもあり、それは東方朔・陶淵明・韋応物の流れをくむものだという。しかしこの時代には、〔詩によって〕上の者が士人を採用し下の者が仕官を得たり、高名を求めて財利も附随して得られたにしても、〔温柔敦厚をめざした〕「詩の教え」だけはなかった。〔我が国の〕隱棲していた詩人たちは、世間に名前を知られたいと望みながらも隱棲していたから、ちょっとしたところにも不満を吐露している。〔この国で〕尚ばれた詩は、所詮は上の人々の好んだものであったから、長慶（白居易）の詩風は日をおって遠ざけられ、ついに詩は滅びてしまった。それから数百年は「国風」が盛んであった。またそれから数百年は、〔世の中が〕混乱のうちに経過して、詩は絶えたままであった。それは、「詩の権」が上の人々にあったからである。

現在、〔詩によって〕名声を得て仕官を求めようとする者は、口々に次のように言う。

「今の世の中は、甲冑を纏い長剣を帯びてたけだけ

しい馬を馳せる者が満ち溢れている。庶吏が官僚となっており、法律を順守したり、武断〔的な処置〕を行なっている者は君子ではない。春の花のように文章が美しくても勤務評定には役立たない。王人である者、諸侯である者、士人である者、諸侯の家臣である者、庶民である者がいるが、生まれながらにはっきりと分れていて、卑賤な者が高貴な身分になることはできない。農民・商人の子供は、いつまでも農民・商人である。たとえ、上の人々が詩によって志をみきわめたとしても、下の者が高殿に登って詩を作ったり李白や杜甫の生れ変わりであったとしても、士人にはなれない。今は、詩について語ることのできない時代である。」

ところが、〔今は〕太平の世が百年も続いて文武両事に安泰であり、素封家はそれぞれの業に勤しみ、老人も子供も大切にされて、のどかな日々が多い。〔上から〕強いられなくても、下々が〔詩を〕好むのは、まさに「帝王の威力は我ら下々には関わりがない」というものだ。錦里夫子（木下順庵）が出現して以来、我が国の詩はすべて唐風となった。現在では、江戸には君美（新井白石）が、北陸には師礼（室鳩巣）が、長崎には林叟（林蘿山）が、京都には伊藤担庵・鳥山芝軒がいて、それぞれ抜きんでいた活躍をしている。[4] 彼らの言説に細かな違いがあるにしても、つまるところ〔唐風の〕流行を聞きつけて世に現われてきた者たちである。これは、「詩の権」が下の人々にあるという証拠である。だから、わたしは「文明の変遷において、現在は太陽が再び中天にあるように盛ん〔な文明〕である」と断言する。

しかしながら、さきの人々は世間から「薦紳先生」と呼ばれた著名人であり、高名を求める気持ちがないとはいえない。江翁の詩を読んで、わたしは本当に詩を愛好する者がいることを知った。江翁の名は「兼通」、字は「子徹」である。先祖に計倪（計然）[5]のような知略を操る者がいて、「摂津の南部は交通の要所であり、数十町に及ぶ田の半分に酒用米[6]を植えて、灌

概には奠水（淀川）[7]を用いるから、その清水を汲めば、すばらしい酒ができ、その評判は遠くまでとどいて、莫大な利益が得られる」と考えた者がおり、その土地〔の者〕に命じた[8]。江翁の代になると、詩を愛好したために利益を殖やすことができず、四十歳になる前に子供に家督を譲っている。江翁は、珍しい書籍を買い集めることに利益をつぎこんでは楽しみとし、さらには年に一度江戸にでて〔支店の〕帳簿を調べたが雇い人と一緒にいてもそぐわなかった。詩心が興って吟咏すると、美しい詩句がつぎつぎにでて、酒樽に反響する。すると酒徒たちはびっくりして店から去ってしまう。これは利益だけでなくすべてを忘れてしまうからである。しかし、日常のことや目先の利益のことなどに拘われていたら、好きなことに熱中できまい。そこで、江翁は本当に詩を愛好していると言うのである。

江翁の詩には、野にいて志を堅持する狷介な趣きはなく、言辞はさっぱりとして、詩趣もあっさりとしている。詩の甘美で深長な味わいには、富貴な家の道楽者の雰囲気はなく自分に相応しい立場や利益を楽しむ〔味わいがある〕。詩のゆったりとした言回しには、中唐・晩唐以上であるとはいえないまでも、字句の使用が適切であり、さながら唐音である。こうしたことは、〔上から〕強いた結果ではないが、そのようにしむけた何かがあるにちがいない。だからわたしは、「かくも神祖が民人に与えた深い慈愛や恩恵があまねくゆきわたっている」と断言する。

江戸を去るにあたり、江翁はわたしに面会して、詩の序文を書くことを依頼した。富貴や繁栄は、〔『左伝』にあるごとく〕燕が天幕の上に巣を作るように脆く、〔楊雄「解嘲文」にあるごとく〕鬼が害なう機会をうかがっているように危ういものであるから、山林に隠棲する人々は近寄らないとされる。また〔『左伝』にあるごとく、大夫に命じられると〕かがみこみ〔卿になればさらに〕身をひくくし〔上卿に至れば〕垣根づたいに歩むという〔昇進するたびに謙虚になるよう

な〕礼儀を、我が国の政治に携わる士人はかえって卑賤なこととする。もちろん江翁は、この〔富貴や礼儀に触れる〕ことを求めてきたわけでも、こうした思いを胸中にいささかなりとも抱いていたわけでもなく、心から詩を愛好しているのみである。また、さきほど言及した幾人もの著名な詩人たちについて、わたしは、人となりは知らないまでも詩についてはよく知っている。そこで、この人々の名前を借りて箔をつけたかにみえるかもしれないが、そうではない。江翁の愛好とわたし自身の好みとが一致したところを述べたまでである。これこそ、〔真に詩を愛好する〕江翁への贈物としてふさわしいからである。

〔訳　注〕

(1)　入江若水の事績については、日野龍夫「入江若水伝資料」(『近世大阪芸文叢談』所収)に詳しい。一六七一(寛文十一)年に生れ、一七二九(享保十四)年に没した。徂徠が文中において著名な詩人として挙げた鳥山芝軒に学んでいる。摂津で酒造業を営み、経済的にはかなり裕福であったという。文中に「来東都…眎会計」とみえるのは、日本橋呉服町に支店があったことによるのであろう。入江若水は『訳文筌蹄』や『蕹園随筆』が出版された際に、その推進役に当たっており、また京阪の文人たちと徂徠とを結びつける重要な役割を果たしていた。このような入江若水の立場から、「叙江若水詩」が序類の最初に置かれたことも、ある程度了解できよう。

(2)　徂徠が、藤原常嗣(七九六～八四〇)と小野篁(八〇二～八五二)の名前を挙げたのは、遣唐使にまつわる故事、つまり藤原常嗣が大使であった遣唐使において、副使に任命された小野篁が「西道謠」を作って誹り、隠岐に流されたという話からであろうか。あるいは小野篁と『白氏文集』に関する有名な故事からであろうか。

(3)　民黒人(タミノクロヒト)は『懐風藻』などに詩が収められている。また西山隠士(サガノインシ)

のことは『本朝遯史』にみえる。

（4）木下順庵（一六二一～九八）、別号錦里、は京都の人、加賀前田家に仕え、のち徳川綱吉の侍講となった。門下に新井白石・室鳩巣・雨森芳洲・祇園南海などが輩出した。新井白石（一六五七～一七二五）、君美はその名、はこの時世子家宣の侍講であったから「江戸」というのであろう。室鳩巣（一六五八～一七三四）、師礼はその字、は加賀前田家に仕えていたから「北陸」という。林蘿山については、「送野生之洛序」の訳注（7）を参照のこと。伊藤担庵、名は宗恕、は京都の人、那波活所などに学び、宝永五（一七〇八）年に八十六歳で没している。鳥山芝軒、名は輔寛、字は碩夫、は伏見の人、京阪で活躍しており、さきに述べたように入江若水の師でもあった。正徳五（一七一五）年に六十一歳で没した。

（5）計倪（計然）は、春秋時代の越の人で、博学であり、殊に計算を得意とした。弟子の范蠡は、計倪（計然）の策を用いて鉅富を得たという。その話は、『史記』貨殖伝などにみえている。

（6）「秫米」とは、「もち米」の意味であるが、ここでは「秫酒」を作る「もちあわ」から転じて、酒を作るための米の意味に解釈した。

（7）釈義端『徂徠集便覧』に従って、「奠水」を「淀川」と解釈した。これは、「奠」が「定」である（集韻）ことからの転用であろう。

（8）ここでは、その土地の者に命じて莫大な利益を得たという意味に理解したが、釈義端『徂徠集便覧』によれば、入江若水が酒造業を営んだ摂津の「富田」という地名の由来を述べた意味だという。この説が事実であるかは、現在のところ未詳。

（澤井）